

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：鈴木 禎宏

論文題目：「東と西の結婚」のヴィジョン：バーナード・リーチの生涯と芸術に関する比較文化的研究

鈴木禎宏氏の博士学位請求論文、「東と西の結婚」のヴィジョン：バーナード・リーチの生涯と芸術に関する比較文化的研究は、近年ようやく本格的な調査が開始されたイギリスの陶芸家バーナード・リーチを、日本において初めて学術研究の対象とした意義深い試みである。東洋と西洋、とりわけ日本とイギリスにまたがる文化的、思想的越境者であり、現実の場では焼き物を制作する芸術家であるリーチという存在とその営為を、基礎的な資料調査を十全に踏まえつつ、「東と西の結婚」というキーワードで真摯に読み解こうとした壮大な企てと言えよう。

鈴木禎宏氏の方法論的な独自性は、これまでなおざりにされてきたリーチに関する基本的事実の確定作業を丹念に行う堅実な実証性の上に立ち、美術史学と比較文化という異なる学問分野双方の利点を生かして研究を進めた点にある。すなわち、未だ全貌が把握しきれないリーチ作品の現時点における充実した目録を初めて作成し、これもまたほとんど試みられていない重要作品の詳細な分析を行ったことは、芸術家リーチを解明するために美術史学の方法を援用した部分に当たる。また、同時代における東西の文学、思想、宗教への幅広い目配りを通して、思想家リーチの歴史的位置づけを的確に行い、「東と西の結婚」というヴィジョンをめぐって重層的な考察をなしたのは、比較文化という視座が有効に機能したからである。こうして、伝記研究と作家論と作品論が融合した包括的、総合的なリーチ研究が可能となったのである。

本論文は3部構成、全11章より成り、それに序論と結論、図版資料、参考文献表、附録としてリーチに関係する資料、書簡、作品の目録等が付加されている。以下、論文の構成に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序論において鈴木氏は、先行研究に言及しながらリーチ研究の現状を提示するとともに、異文化のはざまを生きたリーチ自身の言葉である「東と西の結婚」というヴィジョンに沿って対象にアプローチする妥当性を主張する。ナショナリズム、オリエンタリズムといったイデオロギー批判のみでは捉えきれない、文化の創造的融合の実践例として、リーチの生涯と業績を理解しようとする複眼的な視点には説得力がある。

第1部「東と西の結婚」の形成、第2部「東と西の結婚」の実践(1)は伝記研究と作家論を構成している。まず、前者では1887年から1920年までのリーチの前半生を扱い、その生い立ちから、最初の日本滞在、中国滞在、二度目の日本滞在中を経てイギリスに帰国するまでの生涯、とりわけ交友関係と思想形成のプロセスを着実に追跡している。すなわち、イギリスの美術学校での教育とエッチングの習得、高村光太郎、柳宗悦、岸田劉生らとの交流、近代批判としての中世再発見、日本での陶芸との出会いや自身の作陶活動、中国での磁器の発見、スペンサーの進化論や禅の思想の影響などを通して、東洋と西洋の文化の安易で意図的な折衷ではなく、相互の隔たりを踏まえた上で補完し合って新しい美

を生み出す、「東と西の結婚」の理念形成に至る紆余曲折の道筋が鮮やかに描き出されている。その的確な論証を支える鈴木氏の広い視野と深い学識は、審査員が一致して認めるところであった。

それを受けた第2部「東と西の結婚」の実践(1)では、1920年のイギリス帰国後にセント・アイヴスで製陶所を開き、自らの理想を本国で実現しようとするリーチ後半生の活動を論じている。「芸術家」と「職人」とを峻別する社会の中で、現実的な困難に立ち向かいながら制作活動を続け、次世代の陶工を育成しつつスタジオから工房へと大きく変化していく状況が、資料を駆使して語られる。そして、制作における「自力」と「他力」というリーチ晩年の製作態度を扱う第9章は、近代的な自我を保持する芸術家リーチが、柳宗悦の民芸運動との接触において個が解消する「他力道」の顕現に出会う機会を述べた上で、両者の差異を際立たせた興味深い論となっている。ただし、超常的な体験を記述する際の距離の取り方にはさらなる慎重さを要するとの意見が、審査委員から出された。

第1部と第2部が伝記研究と作家論であるのに対して、第3部「東と西の結婚」の実践(2)は作品論となっており、これまでのリーチ研究と比して大きな寄与となっている。第10章の総論では、東西の伝統の融合へと向かうリーチ作品の段階的発展、制作の根底にある美学や原理、技法的、造形的、図像的なレパートリーなどを俯瞰的に把握する努力がなされている。論旨はおおむね妥当と認められるが、西洋の古典的、近代的な美学との関係におけるリーチ芸術の位置づけに曖昧さが残ること、また生前からあったリーチ作品への批判に対する言及が不十分であるとの指摘が審査員から出された。第11章の各論では、西洋の伝統、東洋の伝統、両者を融合したヴィジョンという三つの観点から代表作例を3点選び出し、詳細な調査分析を施している。新資料も用いながら、造形的、図像的に説得力のある斬新な解釈を展開しており、とりわけ《鉄絵魚文壺 Vase "Leaping Salmon"》と《鉄絵組合せ陶板「生命の樹」》の解析は、「東と西の結婚」という全体の論旨と見事に呼応する、論文中の白眉とも言うべき部分を構成している。ただし、「生命の樹」のモチーフに関しては、なお西洋の過去に遡る図像の系譜を参照すべきとの意見があったことを付記しておく。

最後に付けられた「結論」に関しては、リーチの思想的到達点であるバハイ教に関する踏み込みが弱い点が指摘されたが、本論文の規模と枠組みからして今後の課題とするのが適当との旨が確認された。

全般的に見ると、さまざまな経緯の末にアマチュア陶芸家としてこれまで毀誉褒貶の中にいたリーチを、本格的な学術研究の対象とし、その総体を論じた画期的な功績を評価する点で、審査員全員の判断は一致を見た。とりわけ、徹底した資料探索および資料批判に基づいたリーチの生涯の冷静な再構築、異文化の融合に積極的な価値を与えたリーチの歴史的、今日的な意義を比較文化論的な視点から明確化し得たこと、さらには「東と西の結婚」の理念を陶芸で実践したリーチの作品を美術史的な見地から説得的に解釈し得たことが高く評価された。細部においては、根拠の示されない推論や判断、適切とは言えない表現が散見するとの指摘もあったが、それらは瑕疵に過ぎず、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものでないことが確認された。

以上の審査の後、審査員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、鈴木禎宏氏の提出論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定した。